

プロ野球に学ぶ、ミスターと呼ばれし者の流儀(第5回)

ミスに成功に結び付けた”ムッシュ”吉田義男の失敗学

2016.09.28

野球の醍醐味といえば、豪快なホームランや、胸がすくような三振。注目は、打撃や投球に集まる。これまでの連載で取り上げてきた「ミスター・タイガース」の面々も、4番打者やエースに与えられてきた称号である。

しかし「オレは守備を磨いて観客にアピールしよう」と守備でファンを沸かせ、現役時代に2度のリーグ優勝、監督として初の日本一という、歴代のミスター・タイガースですら成し得なかった偉業を達成した男がいた。阪神タイガースの永久欠番23番、吉田義男氏である。

守備の人にもかかわらず、彼はなぜ歴代のミスター・タイガースをも超える貢献を成すことができたのだろうか。その理由を探っていこう。

失策王を名手に変えた「人は失敗して覚える」

吉田氏は、何も初めから守備の名人だったわけではない。入団時から才能を見いだされ、レギュラーに抜てきされるも、1年目の失策は38、2年目も30と、むしろ“失策王”だった。

しかし、当時の松木謙治郎監督が辛抱強く使い続けた。松木監督は「人は失敗して覚える」が口癖で、失策してしょげる吉田氏に「もう1つエラーしてみろ」と叱りながらも起用し続けた。吉田氏は「プロで最初に巡り合った監督がこの人でなければ、以後の自分はなかった」と振り返る。

入団3年目のオフ、米大リーグのニューヨーク・ヤンキースが来日して、日本チームと16試合を行った。吉田氏も日本チームの一員として参加したが、15敗1分けと圧倒的な力の差を見せつけられた。そんな中、ヤンキースの選手が選んだ「日本で最も傑出した選手」で、吉田氏が選ばれた。

「ああ、こんな自分でも、やれるんだ！」

守備を磨くという自分の考えが、間違えていなかったと知り、吉田氏は意を強くした。

当時の阪神のウリといえば、遊撃手の吉田氏の他、三塁手の三宅秀史氏、日本で初めてバックスを取り入れた二塁手の鎌田実氏らを擁する「黄金の内野陣」だった。その守りの要が吉田氏であり、その華麗な守備から「牛若丸」と呼ばれるほどだった。

吉田氏はやがて、守備以外にも活躍するようになった。例えば盗塁では通算350回に成功しており、これは2009年に赤星選手が更新するまでの球団記録である。打撃も、優勝した64年に打率3割超えをマーク、この年は179打席連続無三振という当時の日本プロ野球記録を達成した。また、通算264犠打は、今でも阪神タイガースの球団記録である。吉田氏は、もはや守備の人ではなくなった。

天国と地獄を味わった監督時代… 続きを読む